

福井県三方五湖の伝統知・地域知

福井県里山里海湖研究所
 総合地球環境学研究所・東京大学
 宮本 康
 吉田 丈人

はじめに

福井県の小学生は、江戸時代に三方五湖で行われた災害復旧工事について学びます。それは、大地震が原因で発生した洪水からの復旧工事です。寛文二年五月一日（一六六二年六月一日）、近畿地方北部を中心に推定マグニチュード七、五の大地震「寛文近江・若狭地震」が発生しました。この時の地殻変動で、三方五湖の東岸から東へ数kmにわたり、地盤が最大で三、六m隆起しました。その影響で流出河川のひとつ、気山古川（図1）が干上がったため、上流側の湖では排水機能が失われてしまいました。その結果、三方湖・水月湖・菅湖（図1）の水位は上昇を続け、湖辺の村々が次々と水没、最終的に一三七軒の家が非難生活を強いられることになったのです。その後、難工事の末に人工水路の浦見川（図1）が完成し、湖の水位が低下して、集落の浸水も治まりました。その過程で湖辺の浅い水域だった場所まで陸地

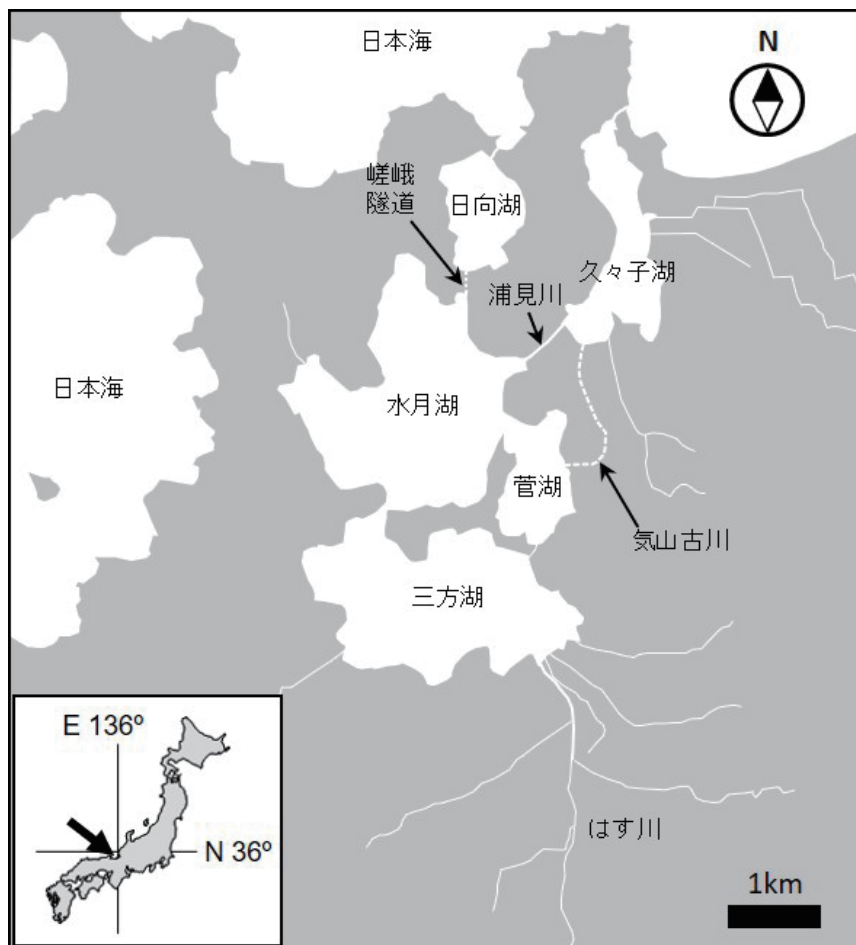


図1 三方五湖の地図

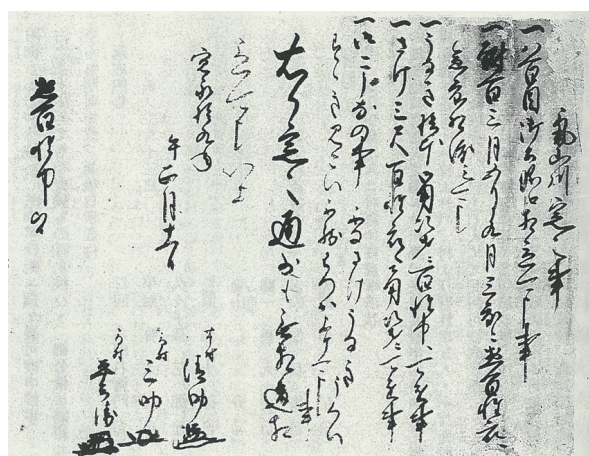


図2 元の流出河川（気山古川）でどんな魚種が漁獲されていたのかを記した江戸時代の古文書 寛永19年（1639）（宇波西神社文書）

化したため、新たに二つの村が誕生するとともに、新田も開発されました。当時、この地を治めていた小浜藩は寛永飢饉からの復興途上にあつたため、新田の増加は復興を支える藩の財政の大きな助けにもなりました。

この災害復旧の顛末は、数々の情報媒体（古文書や石碑など）を通じて

三五〇年以上を経た今日まで伝えられ、歴史の副読本に掲載されるに至りました。その反面、干上がってしまった湖岸の浅場や元の流出河川などが、実は多種多様な魚介類の棲み処であり、それゆえ漁場として利用されてきた史実は(図2)、顧みられることがほとんどありませんでした。ですが、先人たちが自然の恵みをいかに享受してきたのかを伝える史料は数多く存在し、その知恵や技術の一部は現代にも活かされています。本章では、こうした自然の恵みと災いに向き合う地域の知恵や技術と、これらを活

かして現在進められている自然再生と防災・減災の取組みについて、三方五湖の事例を紹介します。

恵みの湖・癒しの湖

三方五湖の湖岸は、福井県の南部地域で人類が最初に定住した場所です。それは今から約一三七〇年前、最終氷期が終わりに近づき、縄文時代が始まって間もない頃のこと。この地に移り住んだ人々にとって、三方五湖の豊富な魚介類は、資源としてとても魅力的



写真1 三方五湖の畔で発掘された最古(約13,700年前)の土器(上、福井県立若狭歴史博物館蔵)と湖で漁獲されたコイ(下)



写真2 三方五湖 複雑な地形に囲まれた汽水湖沼群(下側が北)

だったことでしょう。事実、この地に人が住み始めた頃には、土器を用いたフナやコイの煮炊き料理が既に行われており、その後の九〇〇〇年間、湖辺

の集落が終焉を迎えるまで煮炊き料理は受け継がれました(写真1)。このことは、発掘された土器片に付着したリン脂質の成分を調べることで判明しました。その後、いぶんと時間が下って江戸時代、三方五湖産のウナギが京都で最高級の評価を獲得、関係者に大きな富をもたらしたことが、当時の本草学の書物、そして京都まで生きたウナギを運んだ先人の自伝から知ることができます。昭和時代には、シジミ漁の収益で豪邸が建ち、フナやコイを狙った地引網漁やボラの追込み漁も地域に大きな富をもたらしたことを、年配の漁師さんは今も覚えています。こうして地域の歴史を整理すると、一万年以上の長きに渡り、先人たちが豊かな湖の恵みを享受し続けてきたことがよくわかります。

な地形が所々で淡水と海水の流入を遮るからです。リアス海岸にできた五つの汽水湖沼群、それが三方五湖なのです(写真2)。

三方五湖の複雑な地形は人の心にも影響を及ぼしました。起伏に富んだ地形は絶景として人々の目に映り、長く愛され続けてきました。そして、昭和時代には名勝に指定されるとともに、国定公園の一部になりました。万葉集には三方五湖の美しい景観を詠んだ、こんな詩があります。「若狭なる三方の海の浜清みい行き還らひ見れど飽かぬかも」長きにわたり、三方五湖の自然は人々に食を与え、富を与え、そして癒しを与えてきたのです。

災害多発地帯

起伏に富む地形は良いことばかりをもたらすわけではありません。災害が発生しやすいという悩ましい側面も持ち合わせています。三方五湖周辺の複雑な地形は、断層が動き、大きな地震が起きるたびに創り出されてきました。冒頭で紹介した江戸時代の水害も、断層の活動が引き起こしたものです。また、起伏に富む地形は、それ自体が災害の原因になります。縄文時代の前期(約五八〇〇年前)には、豪雨が原因と考えられる土砂崩れ(写真3)が



写真3 豪雨時に湖岸の急斜面で発生した土砂崩れ(2013年9月)

も浸水災害が起きるようになってしまったようです。近年、洪水による財産の損失と人命の犠牲は、科学技術の発展でいふんと軽減されましたが、それでも完全に防ぐまでには至っていません。三〇五年に一度の頻度で洪水が発生し浸水被害が起こる、というのがこの地域に暮らす人々の認識です。

生き抜くための知恵と技術

しかし、人々は自然の猛威に無抵抗だったわけではありません。災害の被害を受けにくい場所を見つけ、そこに移住することで身の安全を図ってきました。集落が土砂崩れに飲み込まれた後、傾斜の緩やかな場所に移住した縄文人たちの対応がその一例です。先人たちが災害に備え対応していた例は他にもあります。菅湖(図1)の畔では、三方五湖の水位が今よりも高かった江戸時代の初期には、現在より三m以上も高い位置に居住地がありました。その当時の湖の水位と集落の位置が、三〇〇年以上を経た今日まで口伝で受け継がれています(図3)。このように、先人たちが災害を避け生き残るための知恵を長年にわたり積み上げてくれたおかげで、今日に洪水が発生しても、居住地が浸水被害を受けることが少なくなったのです(図4)。一方、

当時の居住地を飲み込みました。その結果、人々は災害前の約八〇〇〇年間にわたり住み続けた場所を去り、傾斜が穏やかな場所への移住を余儀なくされました。時代が下り、文書記録が残る中世以降も、災害の記録が絶えませんでした。後に「卯年の洪水」と呼ばれた享保二〇年六月(一七三五年七月)に発生した大洪水では、多くの家々や寺が壊れて流出するとともに、人馬が濁流に飲み込まれたという、生々しい記録が残されています。それに加え、洪水に備えて掘られた嵯峨隧道(図1)までもが崩落し、その後の数十年間、この隧道が再建されるまで、少ない雨で



図3 口伝で伝えられる江戸時代初期の水位、および、現在の水位（菅湖）

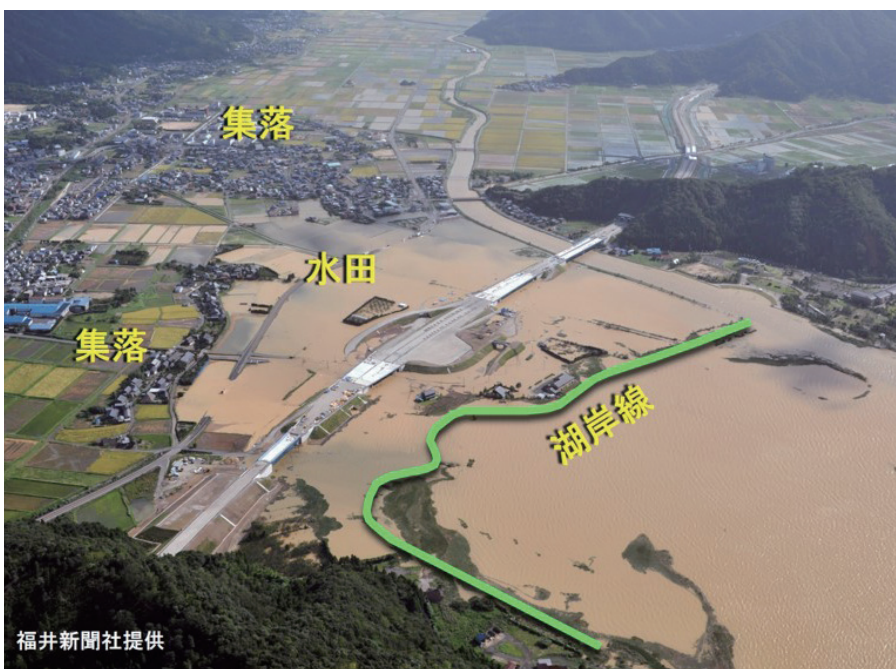


図4 浸水災害を避ける集落の立地(2013年9月の洪水発生時)

洪水の時に浸水する場所の多くは、水田として利用されてきました（図4）。浸水しやすい低地にあり湖とのつながりがある水田や水路は、フナやコイなどの魚類や多くの水生生物にとって重要な生息場所となっています。

先人たちの知恵は、災害から身を守るためだけのものではありません。災害を引き起こすような極端な自然現象を生活に活かそうとする、したたかな知恵と技術も育まれてきました。例えば、大雨により洪水が発生すると、大量の土砂が川の上流から湖へと運ばれます（写真4）。この土砂を、湖辺での田地拡大に利用し新田開発を進める知恵と技術が、遅くとも今から三〇〇

年ほど前（江戸時代中期）には存在していません。そして、減反政策が始まる昭和時代の中頃まで、この知恵と技術は農業の間で受け継がれてきたのです。平成時代に入ると、この知恵と技術は漁業者によってシジミ漁場となる砂浜の再生に応用され、ヤマトシジミを増やすことに成功しています。

伝統知・地域知の活用現場：三方五湖自然再生協議会
 自然の恵みと災いに向き合う地域の知恵や技術は、伝統知や地域知というかたちで、今を生きる私たちに受け継がれています。近年では、こうした伝統知・地域知の価値が見直され、自然再生や災害対応の実践で活用されるよ